

海外シリーズ⑥

メキシコの留学生・P.S.君

—— メキシコへの旅 ——

設 楽 正 雄

1. P.S君への思い出

ある日突然、私の研究室に、メキシコの留学生が訪ねてきた。「私は機械工学科の3年生でP.S.と言います。管理工学を専門に勉強したいので、是非先生のゼミナールに参加させて下さい」とのこと、然し学制上は4年生からゼミに配属になるので(104単位以上獲得して)、「君には資格が無いので、正式に入れるわけにはゆかない。どうしても勉強したいというのなら、員数外として特別に認めよう。然し3年生と4年生(正式)と2年間在籍しないと、単位はとれないよ」と注意したところ、「それは私の望むところですよ」といって、翌日から研究室のロッカーに荷物を入れるようになった。

色々と話してみたところ、彼はメキシコの国立自治大学(Universidad Nacional Autonoma de Mexico)を出ており、既に26才であることが判明した。日本語の会話はあまり流暢ではなかったが、読み書きは堪能で、日本人のゼミ生よりも、漢字をよく知っており、彼に習っているものもいた。

自国語がスペイン語である点、又工学部の学生である点をフルに利用して、スペイン圏からの技術調査団の通訳や、交換文の翻訳などを引受け、かなりのアルバイト料を稼いでいたようだった。

立派なマンションに住み、電器製品を全部揃えて裕福だったらしく、設楽ゼミの学生がよく押しかけて御馳走になっていた。その代り、3年生末で104単位とれそうにもなかったもので、彼の製図を手伝い、レポートも原稿を書いてやったり、ゼミ生全員の協力のもとに、やっと105単位を取得

して、4年生となり、正式に管理工学ゼミ生となった。

彼には特に東洋的な思慮があり、礼儀正しく、いわゆる西洋人の凶々しさはなかった。私は日本能率協会に関係しているので、彼を調査に派遣したところ、色々の資料をもらって帰り、その都度先方に礼状を出しているのには、協会幹部も感心しておられた。

2. メキシコ・シティーでの再会

4年生の夏休みも近くなり、就職活動も激しくなったので、P.S君を呼び、「君はメキシコに帰って就職するのか」と聞いたところ、「私は日本の会社に就職します。そして2、3年実務を経験してから、メキシコの工場に派遣してもらいます」と答えた。

前にも述べたように、メキシコと密接な交渉のあるN製鉄とK製作に、週1度アルバイトで通っていたので、ブルドーザで有名なK製作に就職の交渉をしてみた。外人の採用については難色があったが、彼の人物をよく知っている関係で、4月入社が決り、関西のO工場に配属になった。

暑中見舞と年賀状程度のやりとりをしている間に、関東のK工場に転勤になり、何年かしてメキシコからの手紙が届いた。早速K本社に問い合わせたところ、メキシコの現地法人の子会社に転属した由であったが、外人の処遇には苦労が多かったと附言された。

その後、夫婦でメキシコに行く機会ができたので、早速P.S君に航空郵便で、メキシコ・シティー滞在の日数と宿泊ホテルを連絡し、都合がつけば会いに来るように書いておいた。

ブラジルで、サンパウロ、リオデジャネイロ、イグアスの滝、ペトロポリスを回り、コロンビアのポコダを径由して、メキシコ・シティーのプレ

明治大学工学部 元教授、工学博士

(昭和13年、早稲田大学、理工学部、応用化学科卒・旧制

18回)

ジデント・ホテル (El Presidente Chapultepec, Mexico, D. F.) に投宿した。

P.S 君の来訪を期待して夕食も早目に済ませ、ホテルのロビーで首を長くして夫婦で待ったが、ついに彼は姿を見せなかった。

彼の住所を示し (電話番号は書いてなかった)、フロントで場所を聞いてみたら、「郊外で車で2時間位の距離」との返事だった。

夜おそくなって家内が、ぼつりと言った。「P.S 君はメキシコに帰り、期待に反して不遇になっているのかもしれませんが。そうでなければ必ず来ますよ。そっとしておいてやりましょう。」

夫婦は寂しく部屋に帰り、ベッドに入った。それから、日本へも年賀状が来なくなった。

3. ティオティワカンの遺跡

メキシコ・シティから 51 km, サボテンと太陽のもとに眠る古代都市, テオティワカン (Teotihuacan) の遺跡に車を走らせた。

紀元前後から 650 年ごろにかけて栄えた都市で、「死者の道」(C. de los Muertos) が南北に走り、その左右に数多くの神殿や宮殿が整然と配置され

ていた。

「太陽のピラミッド」(Piramide del Sol) はその道の中間にあり、高さ 65m, 基底の一辺が 224m という巨大な建造物である。

数年前、エジプトの「カイロ」の郊外にある「ギザ地区」(Giza) のピラミッドを観光したことがある。

底辺が各 220m (東西南北に正しく向いている)、高さ 146m で、メキシコのものより一段と高く、1 個 2.5 t もの巨大な石を 200 万個以上も用い、10 万人が従事して 20 年もの歳月をかけて建造された。

案内人に導かれてピラミッドの中段まで登ってから中に入り、天井の低い急な階段を一旦下り再び登るとかなり広い矩形の部屋へ出る。そこが王の玄室であるが、中には壊れた石棺があるだけで、豪華な調度品や宝石などは全部盗掘者によって奪われたようだ。

メキシコのピラミッドは、エジプトのそれに比べれば、「土まんじゅう」のような感じで荘厳さには欠けるが、石段があり簡単に頂上まで登れ、そこからの展望はすばらしいからとすすめられた。

しかし、実行してみるとかなりの強行軍なので、八合目あたりで断念して、あたかも頂上に立ったかのような写真を撮り、一休みしてから下山した。

死者の道のつきあたりには、「月のピラミッド」(Piramide de la Luna) があり、太陽のピラミッドより小型で、底面積 150×120m, 高さ 42m の規模であったが、眺めるだけで登るのは中止した。



太陽のピラミッド

4. チャプルテペック公園

市の西部には、世界的な規模を誇る「チャプルテペックの森」(Bosque de Chapultepec)という大公園がある。広大な園内には、各種の博物館、動物園、ボート場、遊園地などがあり、憩いと娯楽、文化の中心として市民に親しまれている。

「国立人類学博物館」(Museo de Antropología)はメキシコ自慢のもので、現代メキシコの代表的な建造物で、1階は主に古代インディオ文化の逸品が集められているし、2階にはインディオ、つまり古代文明を築いた人々の民族史を扱い、その民芸品には大いに興味が引かれる。

ごく最近(昭和60年12月末)盗難に会い、ヒスイ類の展示品173点が紛失した。この中にはマヤ文明が生んだ最高傑作「ヒスイの仮面」をはじめ、学術、美術的に一級の価値を持つ品が多く含まれており、同博物館は「メキシコが世界に誇る貴重な文化財を失った」と嘆いている。被害金額は2億ドル以上と推定された。「ヒスイの仮面」は、1952年にユカタン半島パレンケで発見されたピラミッド状王墓の石棺に収められていたものを完全復元した逸品であった。

捜査当局によると、同博物館には、電子警報装



国立人類学博物館

置が設置されておらず、全展示品に保険も掛けてなかった由でお粗末だった。

「チャプルテペック城」(Castillo de Chapultepec)が丘の上にそびえており、マクシミリアン皇帝の宮殿として使用されていたが、現在は歴史博物館として植民地時代の絵画や遺物が展示されている。

5. グアダルーベの聖母

テペヤツクの丘のふもとで、巡礼者たちが石畳の上に痛みをこらえながらひざまずき、円錐型の屋根の先に十字架をつけた大きな円形の建物に向かって、少しずついざり寄っていく。彼らは奇跡の乙女、「グアダルーベの聖母」の祝福に浴するため、こうやって来たのだ。

建物の内部に入ってみると、金箔でおおわれた高くそびえる壁に、清らかな姿の乙女が描かれている。この絵姿が世界中から年間1,000万の巡礼者をひきつけている。

まばゆく輝くパシリカ(大聖堂)は、ローマのサンピエトロ大聖堂に次ぐカトリック信者の巡礼地となっている。土地のインディオ「ホアン・ディエゴ」が聖母マリアのお告げを聞いたのがもとで、ここに教会が建てられた。

メキシコ・シティーで最も権威のある寺院はソカロにある「カテドラル」だが、庶民はグアタルーベ寺院の方をより信仰しているようで、浅草の観音さまといった感じだ。

旧ガタルーベ寺院も近くに残存しているが、大部傾いて危険になっているので使用を中止しているようだった。附近には、浅草の仲見世に相当する土産物屋が軒を並べ、中には子供のダンス・ショーを見せるレストランや、泥棒市らしい露店商も道路に品物を展開していた。

昨年9月(1985年)メキシコに大地震が起り、メキシコ・シティーの一部が崩壊して世界の注目を浴びたが、その後P.S君はどうしているのか、又多くの遺跡や名所が無事だったのか、確かめていないのは残念だ。

(昭61.1月、記)